

藤原定家七七日表白文について

佐藤 恒雄

【要 旨】

藤原定家七七日の追善法要にあたり、施主である嫡男為家が、東大寺の学僧宗性上人に依頼して執筆された「表白文」の草稿が、宗性の著述の一つ『春華秋月抄草』の中に残されている。その文章について、まず本文を判読確定し、語釈と注釈を加えながら詳細に読解した上、定家と為家の伝記研究に関わるその意義に言及した。

一

東大寺の宗性（そうしょう）上人（建仁二年（一一〇二）—弘安元年（一二七八））は、歌人藤原信実の甥（兄隆兼の男）にあたる貴族出身の学侶で、膨大な著述を残した上、僧綱としても東大寺別当職にまで至り、後嵯峨院時代に重用された高僧であった。^{〔注1〕} その宗性の著述中の一編『春華秋月抄草』（全二十六卷）

の「第十九」に、藤原定家七七日の法会に際し、施主為家の誂えを受けて草されたと見られる文章の草稿が収められている。

同じ宗性による『春華秋月抄』（全十一卷）には採録されていないから、作者としてなにか不足を感じる文章であったように、従って加除の多い草稿のままで、法会に用いられたはずの清書定稿も伝わらない。

この文章については、最初平岡定海師が『東大寺宗性上人の研究並史料』^{〔注2〕}に、原本文にはない「○藤原定家七七遠辰表白文」の仮題を付して翻刻紹介され、その後、辻彦三郎氏が『藤原定家明月記の研究』^{〔注3〕}中に全文引用、また『鎌倉遺文古文書編』^{〔注4〕}にも「藤原定家七七忌表白文」の標題で採録されているが、本文はすべて、最初にこの文章を紹介された平岡師の訓み（草稿の最終形による）のままで、また三者とも注解等内容に関わる考察はない。定家は、仁治二年（一二四二）八月二十日に没したので、その七七日は、八月（大）・九月（小）を中にはさんで、十月九日であった。

原本は、東大寺図書館蔵（二三五・目二七九）。縦二九・〇センチ×横二三・五センチ、厚手斐紙表紙（大きな簀子目が見える）は、膠様の透明な塗料でコーティングされる。表紙中央に「春華秋月抄草 第十九」左下に「権大僧都宗性」と打付け書きの外題がある。本文料紙はやや薄手の斐紙、すべて裏打ち補修されている。右端より一・六センチの上下二箇所、上から七・五センチの位置から一・五センチ、下から七・五センチの位置から一・九センチの部分に紙縫で綴じた、大和綴。なお、さらに右端上下（上〇・七センチ、下〇・五センチの位置）を小さく綴じてメクレを防ぐ手立てとする。三丁表から本文が始まり、一面八行書き。墨付き五十二丁。大型の鎌倉期古写本で、すべて宗性の自筆である。

二

本稿では、まず自筆原本の写真版（東京大学史料編纂所蔵。紙背文書・紙背書付を含む。現装丁に改装される前に綴じ糸を解いて撮影されている）に拠り、平岡師翻刻の若干の誤読を正しながら、文章制作の機微を窺うべく、見せ消ちや修訂の多い草稿の姿を出来るだけ忠実に再現することに努め、併せて稿末に影印を添えることとした（図版1～5参照）。

〔前丁書付〕

仁治第二天、秋霧久纏身、中秋南呂中旬之候、朝露漸欲消之期ニ當テ、手執春木書^{所願之言}弥陀如来決定来迎之詞、口唱佛号、遂往生之望御キ。

（一行余白）

彼吉藏法印終焉蕪筆未書

（一行余白）

此先考聖靈最後執筆忽書弥陀如来決定来迎之詞
上代^古猶載傳記^{為後事}来葉二、末代非』（3才）

（一行余白）

爰大施主亜相殿^傳下覺累業之遺塵、恣光花於一身ニ。難遇者明主也、抽忠直於五代之朝、難興者家門也、繼官榮於曾祖之跡。

（五行余白）（3ウ）

〔本文〕

捧講經論議所生惠業、併奉資先考禪定黃門侍郎御菩提ニ。夫慈父恩德、内教外典同載之、上聖下凡皆報之。思其恩山之高々於二花之[※]、顧其德海之深々於七葉之水。貴賤有心之人誰不報其德哉^思。伏惟、先考聖靈者、爲大廉五葉之後胤、仕明主

數代之聖朝二、以忠直報君以廉潔□□、詩歌風

月、窮深粹於意底、仁義礼智、惣才湛廉直於身

上二。君施殊聖之恩、家光來之榮、朝□□頗加

「4丁紙背」宗性 承源 (以下二行4才末尾修訂の最終形)

詩歌風月、窮深粹於意底、信義礼智、湛才智於胸内。

世賞其直廉之譽、君施其殊絶之恩。

高路高進、伏シテ以ク、初經羽林而昇移八座、後備龍作而至

二品。遂使字功成身退之玄訓、類浮業於春夢

遂出家人道之素懷、澄觀念於曉月二。然間仁治

第二之天、秋霧窶纏身、金商中秋之候、朝露

漸欲消之期二当テ、手執春本、書祈願之書、

唱佛号、忽告□□浮生之別御。彼吉藏法印ハ終焉

執筆書見、其初生即知終死之甫。此先考聖靈ハ、最

後右筆書弥陀如来決定来迎ト。彼只永生死必然」(4ウ)

之深理、此懇述往生淨刹之深志。以昔思今、々遍

超昔。彼猶載傳記、而永来葉、此豈於末代、而非

勝事哉。先考聖靈、出離生死、往生極樂更無

其疑者歟。爰大施主亜相殿下、傳累葉之遺塵、

恣光花於家門。難值者明主也、忝拙忠直於賢

王聖主五代之朝。難興者家門也、□□再繼官祿

於、々、々、曩祖之跡。抑是誰力哉、偏為先考聖靈

之餘慶。依之報恩謝德之御志銘肝也、孝行」(5才)

追修之御誠、切ニ意底ニ御スヲ以テ、中陰一周之内、

勵修如法如說妙經書寫之行、遠辰七廻之今、

展本門迹門開講談論之筵ヲ。所講者四佛知見

難解之妙理、聲明疎少髻上之月。所談者一乘

奧底甚深之要義、駕牛車於門外之風。道儀

雖為勤重、感應定為速疾者歟。若爾先考聖靈、

住行向地之間術、頗循理行於三僧祇之秋霜、

戒定惠解之果德、□□於二轉依之曉月露。」(5ウ)

化功歸命、故大施主亜相殿下、高官厚祿、久施

一門之光榮貴職、猶通□□百年之天運、

凡厥蘭臺之粧、雨露潤厚、千葉之蓮、思淨遠

及。凡厥聞法隨喜之人、□□臨床之輩

皆答一乘一實之功力、必滿今世後世之願

念。乃至有頂無間利益等南、儀同沙界

濟度□□及。抑通經有多文、其解文如何。

(一行余白) (6才)

三

この文章を、修訂の最終形に拠って訓み下すと、以下のとおりである。

〔前丁書付〕

仁治第二ノ天、秋霧久シク身ニ纏ハリ、南呂中旬ノ候、朝露漸ク消エナント欲ルノ期ニ當リテ、手ニ春木ヲ執リ、祈願ノ言ヲ書シ、口ニ佛号ヲ唱ヘテ、往生ノ望ミヲ遂ゲ御シマシキ。

(一) 行余白

彼ノ吉藏法印ハ、終焉ニ筆ヲ蕪シテ未ダ：ヲ書セズ、

(二) 行余白

此ノ先考聖靈ハ、最後ニ筆ヲ執リテ忽チニ弥陀如来決定来迎之詞ヲ書セリ。上古猶ホ傳記ニ載セ後事ト為シ、末代：ニ非ズ。

(一) 行余白

爰ニ大施主亜相殿下、累葉ノ遺塵ヲ傳ヘ、光花ヲ一身ニ恣キママニス。遇ヒ難キハ明主ナリ、忠直ヲ五代ノ朝ニ抽ンズ。興シ難キハ家門ナリ、官榮ヲ曾祖ノ跡ニ継ゲリ。

(五) 行余白

〔本文〕

講經・論議ヲ所生ノ惠業ニ捧ゲ、併シナガラ先考禪定黃門侍郎ノ御菩提ニ資シ奉ル。夫レ慈父ノ恩徳ハ、内教・外典同ジク之ヲ載セ、上聖下凡皆之ヲ報ズ。其ノ恩ヲ思ヘバ山ノ高キコト二花ノ峯ヨリモ高ク、其ノ徳ヲ顧ミレバ海ノ深キコト七葉ノ水ヨリモ深シ。貴賤・有心ノ人誰レカ其ノ恩ヲ報ゼザラン哉。

伏シテ惟ンミレバ、先考聖靈ハ、大廉五葉ノ後胤トシテ、明

主數代ノ聖朝ニ仕ヘ、詩歌風月、粹深ヲ意底ニ窮メ、仁義礼智、才智ヲ胸内ニ湛フ。世ハ其ノ直廉ノ譽レヲ賞シ、君ハ其ノ殊絶ノ恩ヲ施サル。(伏シテ以ヘラク) 初メ羽林ヲ經テ八座ニ昇リ移リ、後チ龍作ニ備ハリテ二品ニ至ル。遂ニ字功ヲ使テ身退ノ玄訓ト成シ、浮業ヲ春夢ニ類ヘテ、出家入道ノ素懷ヲ遂ゲ、觀念ヲ曉ムニ澄マス。然ル間仁治第二ノ天、秋霧襲シバ身ニ纏ハリ、金商南呂ノ候、朝露漸ク消エナント欲ルノ期ニ当タリテ、心ヲ正念ニ住ドメ、口ニ佛号ヲ唱ヘテ、南浮ノ棘路ヲ辞シ、西刹ノ花臺ニ移リ御シマシキ。彼ノ吉藏法印ハ、終焉ニ筆ヲ執リテ書見シ、其ノ初生即終死ナルヲ知レリ。此ノ先考聖靈ハ、最後ニ筆ヲ右リテ弥陀如来決定来迎ト書セリ。彼ハ只ダ生死必然ノ定理ヲ永クシ、此レハ懇口ニ往生淨刹ノ深キ志ヲ述ブ。昔ヲ以テ今ヲ思ヘバ、今ハ遍ヘニ昔ニ超ヘタリ。彼ハ猶ホ傳記ニ載セテ来業ニ永クシ、此レハ豈ニ末代ニ於ケル勝事ニ非ズ哉。先考聖靈ノ、生死ヲ出離シ極楽ニ往生セルコト、更ニ其ノ疑ヒ無キ者歟。

爰ニ大施主亜相殿下、累葉ノ遺塵ヲ傳ヘ、光花ヲ家門ニ恣キママニス。値ヒ難キハ明時ナリ、忝ケナクモ忠直ヲ賢王聖主五代之朝ニ抽ンズ。興シ難キハ家門ナリ、再ビ官祿ヲ長家・忠家曩祖ノ跡ニ繼ゲリ。抑ソモ是レハ誰ガ力ナル哉、偏ヘニ先考聖靈ノ餘慶タリ。之ニ依リ報恩謝徳ノ御志肝ニ銘ズルヤ、孝行追修ノ御誠、切ニ意底ニ御スヲ以テ、中陰一周ノ内ニ、如法如説妙經書寫ノ行ヲ修シ、遠辰七廻ノ今、本門迹門開講談論ノ筵ヲ

展ク。講ズル所ハ四佛知見難解ノ妙理、瑩明ヲ髻上ノ月ニ疎ケ
 ズル。談ズル所ハ一乘奥底甚深ノ要義、牛車ヲ門外ノ風ニ駕ス。
 道儀勤重ト雖ドモ、感應定メテ速疾ナル者歟。若シ爾レバ、先
 考聖靈、向地ノ階級ニ住行シ、因行ヲ三僧祇之秋霜ニ縮メ、惠
 解ノ内證ヲ戒定シテ、果徳ヲ二轉依ノ晝露ニ備ヘン。

化功ニ歸命ス。故ニ大施主亜相殿下、高官厚禄、久シク一
 門ノ光榮ヲ貴職ニ施リ、猶ホシ□□百年ノ天運ヲ通フ。蘭臺
 ノ粧ヒ、雨露潤厚ニ、千葉ノ蓮、思淨遠及セン。凡ソ厥レ聞法
 隨喜ノ人、入來結縁ノ輩、皆ナ一乘一實ノ功力ニ答ヘ、必ズヤ
 今世後世ノ願念ヲ滿タサン。乃至有頂無間利益等南、儀ハ沙界
 ノ濟度ニ同ジク無漏ナリ。抑モ通經スレバ多文有リ、其ノ解文
 ヤ如何。

四

この文章の読解を試みる。多用される仏教語については、中
 村元著『仏教語大辞典（縮刷版）』^(注5)ほかに依るが、一々に典拠を
 示すことはしない。分段して示したように、この文章は四部よ
 り構成される。

第一段落は、全体の序にあたる部分。「講經」「論議」は、經
 文を講じ問答論議することで、後文に「本門迹門開講談論ノ筵
 ヲ展ク。講ズル所ハ四佛知見難解ノ妙理、瑩明ヲ髻上ノ月ニ疎

ケヅル。談ズル所ハ一乘奥底甚深ノ要義、牛車ヲ門外ノ風ニ駕
 ス」とあるのを、要約提示した。「所生」は、生みの親、父母。

「惠業」は、善業、追善供養。「先考」は、死んだ父、亡父。「侍
 郎」は、中国唐代には門下省・中書省の次官級の者を呼ぶ名称
 で、また少輔の唐名であるが、ここは「黃門侍郎」で「樞中納
 言」を意味せしめたものか。「菩提」は、死後の冥福。本日の講
 經・論議を生みの親の追善供養に捧げ、法会のすべてを入道權
 中納言定家の死後の冥福に資し奉る、と最初の一文にまず法会
 の主旨が明言される。そして、慈父の恩徳については、内典も
 外典も同じく之を載せ、上聖も下凡も皆その恩徳に報いてきた
 ところで、二花の峰よりも高いその恩、七葉の海よりも深いそ
 の徳に対し、貴賤の心ある人は誰もがその恩を報じてきたと、
 慈父の恩徳への報謝を普遍的な一般論として説き、序としている。

第二段落は、追善を受ける定家について、最要の事跡が述べ
 られる。「大廉」はこの上なく廉潔な人物。「五葉」は五世代。

「大廉五葉之後胤」とは、長家・忠家・俊忠・俊成・定家と連続
 してきた廉潔なる御子左家の五代目の意。「明主数代之聖朝」は、
 明君が数代にわたって続いた聖代。後文に「賢王聖主五代之朝」
 というのに同じ。後鳥羽・土御門・順徳・（仲恭）・後堀河・四
 条の五代の朝廷に仕えてきたことをいう。「粹深」は「深粹」に
 同じ。奥深く、趣深く、かつ雑りけがないこと。「才智」は、才
 能と知恵、心の働き。先考定家の聖靈は、長家以来続いてきた

廉潔なる御子左家の五代目として、明主數代の聖朝に仕え、詩歌風月の道にあつては、深粹を心の底に窮め尽くし、仁義礼智の徳や学問の世界にあつては、才智を胸の内に湛えていた。世間はその廉直を誉れとして称賛し、明君たちは特別にすぐれた聖恩を施してくれた、とまずその生涯が概括される。この部分、紙背の書付に気付かなかった従前の訓みは「詩歌風月、窮涼粹外意底、信義礼智、湛才智於胸内。世賞廉潔之譽、君施聖恩」であつた。文章の完成度からしても、紙背本文によるべきであろう。

次の「伏シテ以^(おもへ)ク」は、修訂の際挿入されたまま消されずに残っているが、すぐ前の「伏惟」と重複するから、削除されるはずの文句であろう。「八座」は、定員が八人の参議のこと。「龍作」は、中納言の異称。「字功」は文字の功（いさおし）で、古典書写や『明月記』の筆録をいうか。「身退」は身の進退か。「玄訓」は奥深い教え。初め近衛府の少将・中将を経て、参議に昇進し、その後権中納言正二位に至つた。遂には、文字の功を以て生涯の玄訓とし、浮世の業は春夢に等しいと達観して出家入道の本懷を遂げ、暁月のもと観念を澄ましていた、とその閨歴が辿られる。

「秋霧」は、季節の秋霧であるとともに、病気の隱喩。「金商」は、秋の異称。「南呂」は、陰曆八月の異称。「南浮」は、南閩浮提。須弥山の南方の海上にあるという島の名。転じて人間世

界、現世。「棘路」は公卿のこと。「西刹」は西方浄土。阿弥陀仏の極楽浄土。「花臺」は蓮花の台。然る間、仁治二年になって病氣が身に副い、秋八月の候、朝露が漸く消えようとする最期に当たつて、心を正念に住どめ、口には南無阿弥陀仏の佛号を唱えつつ、現世における公卿を辞し、西方極楽浄土の蓮の台に移り住まわれた、と臨終の時に説き及ぶ。そして臨終に際しての定家の行為が、往昔の吉藏法印のそれと比較しつつ記される。

吉藏は、唐の僧で、号は吉祥大師。三論宗を大成し、著に中論・百論・十二門論・維摩經等の注があり、吉祥大師をまつる法会「吉祥会」は、東大寺の惣持院で毎年五月十五日に行われる。その吉藏法印は、終焉に当たり筆を執つて書見し、「初生即終死」であるとの理を悟り、生死必然の定理を将来永くに残された。「右筆」は、筆を執ること、執筆に同じ。「淨利」の「利」は、国土、清浄なる国土、浄土のこと。定家は、最期臨終に際して筆を執り「弥陀如来決定来迎」と自ら書き付けて、懇ろに往生浄利の深い志を表明した。かくして昔の吉藏のことを以て今の定家のことを考えてみると、今の方が遙かに昔に超越して立派である。吉藏の行為は伝記に記して末代まで永く伝えたが、定家の行為は類まれな末代における勝事であつて、このことある故に、先考の聖靈が、今や生死を出離し極楽に往生していることは、まったく疑いないところだ、とその奇特さが強調されるのである。

この部分の推敲の跡をたどってみると、初案は「仁治第二之天、秋霧久纏身、申秋南呂中旬之候、朝露漸欲消之期二當テ、手執春木書^{所願之言}弥陀如来決定来迎之詞、口唱佛号、遂往生之望御キ」であつた。^(注6)これを二分して増補し、後半を古藏法印と対比する形としてからは、「彼古藏法印終焉撫筆未書」^古「此先考聖靈最後執筆忽書弥陀如来決定来迎之詞」^{為後事}「上代猶載傳記来葉二、末代非」と、何度か修訂を繰り返して、本文の形に落ち着いたらしい。特に「手執春木」↓「執筆」↓「右筆」と推敲された跡を見ると、定家臨終時のこの奇特な行為は、為家から宗性に洩えられた最重要事項であつたことを思わせる。^(注7)

第三段落は、追善する大施主権大納言為家の事跡が述べられる。「累葉之遺塵」は、累代の先祖たちが残してきた跡。「光花」は、美しい輝き。「家門」は、家、一家一門。「明時」は、太平の世。「賢王聖主五代之朝」は、後鳥羽・土御門・順徳・(仲恭)・後堀河・四条の五代の朝廷。「再繼官祿於長家忠家義祖之跡」は、官祿において初代長家二代忠家の跡である大納言の官を再び継いだ。ここまでは、大施主重相殿下為家は累代の先祖たちが残してきた跡を伝え、さらに恣に美しい輝きを家門に加えた。遇いがたいのは太平の世だが、忝なくも賢王聖主五代の朝に際会し拙んでた忠直をもって仕え、興しがたいのは家門だが、官祿において初代長家二代忠家の跡(である大納言正二位の官位)を再び継いだ、と述べられる。「再繼」とは、初代長家

が正二位権大納言民部卿、二代忠家が正二位大納言であつた官位が、三代俊忠になると従三位権中納言、四代俊成は正三位皇太后宮大夫、五代定家は正二位権中納言民部卿と、羽林家としては久しく低迷してきた、その家の官祿回復の悲願を、為家の代に果たしたことを意味している。この部分の初案が、「爰大施主重相殿下受^傳累葉之遺塵、恣光花於一身二。難遇者明主也、抽忠直於五代之朝、難興者家門也、繼官榮於曾祖之跡」であつたことを考慮すると、前半の文章もそのことを婉曲に表現したものであるに相違ない。為家半生の功績の最要が、まさしく任権大納言の実現にあつたことを自らが認め、宗性に洩えて、先考定家聖靈の前に誇らかに強調していることになる。^(注8)

さて、抑も官位の回復は誰の力に依るのか。それは偏に先考定家聖靈の餘慶であると、追善される定家の徳を称揚し、その先考聖靈に対する報恩謝徳の志を肝に銘じて、孝行追修の誠を心底に抱き、施主為家は中陰一周の間法華經書写の行に励んで、七七日忌の今ここに法華八講の法会を開き、本門迹門を談論する場とした、と続ける。「本門」は本地のことで、法華經二十八品のうち、仏身の本地と本地法身の徳を明かした後半の十四品をいう。「迹門」は、垂迹のことで、仏の応迹(救うはたらき)を示す方面の意、また法華經二十八品のうち、前半十四品をいう。「四仏知見」は、法華經方便品に、仏が世に現れたわけは一切衆生をしてこの仏の知見を開・示・悟・入させるためである

と説いたので、これを開示悟入の四仏知見という。「瑩明疎於髻上之月」の、「瑩」は、輪郭を浮き出させる光。あきらか。「髻」は、もとどり。「疎」は、うとい。まばら。くし。くしけずる。「瑩明ヲ髻上之月ニ疎ル」と訓み、後文の「牛車ヲ門外ノ風ニ駕ス」と対句を構成する飾りであろうが、意味するところはよく判らない。「一乗」は、仏の真の教えは唯一無二であり、それによつてすべての衆生は成仏できると説く教法で、特に法華經を指すことが多く、ここもその意。「奥底」は、奥深い底。「要義」は、要旨。「道儀」「勤重」は未詳。「向地之階級」も未詳。「因行」は、仏となるための因となる行。「三僧祇」は、「三阿僧祇劫」の略で、菩薩が仏となるまでに経過する無限に長い時間を三分したもの。悟りを得るまでの無限に長い時間。「惠解」は、賢くさといこと、智恵が早いこと。「内証」は、真理を自己の心内で証悟すること。「戒定」は、身を制する持戒と心を静める禪定。「果徳」は、結果に備わった功德。「二転依」は、煩惱を転じて涅槃を得ること。この部分は仏教語をちりばめた美文で、不明の語彙も多く、正確を期したい。今この法会において講ずるのは四佛知見難解の妙理、談ずるのは法華經の一乘奥底甚深の要義であるから、仏の感応は定めて速やかであろう。もしそうなら、先考聖霊は向地の階級に住行し、菩薩から仏となるための行に要する無限に長い時間を短縮し、賢く聡い内証を戒定して、煩惱を転じ涅槃をうる曉に備えているであろう、との

内容であろうか。施主為家が、法華八講の法会を開き、本門迹門を談論する場を設けたことが、先考定家聖霊の菩提に資していることを述べていると見える。

なお、この段落に述べられている表現（「修如法如説妙經書寫之行」「展本門迹門開講談論之筵ヲ」「所講者四佛知見難解之妙理」「所談者一乘奥底甚深之要義」など）のはしばしから、何度かそれに言及したように、この日の法会が法華八講であつたことは、ほぼまちがいない。それも四日間をかけて行う正規の八講ではなく、この時代に例の多い「一日八講」^(注9)であつたと見てよいであろう。

第四段落は、全体の結語にあたる部分である。「化功」は、造化の働き、天地万物の運行。また教化の功德。「帰命」は、自己の身命をささげて仏に帰依すること。「故」は、ことさらに、まことに。「施」には「侈」に通じ「ほこる・おごる・ほしいまま」などの意味があり、「キハム」の古訓もある（字鏡集）。「貴職」は高い官職。「蓮」は、次へおくる、つたえる。「天運」は、運命。「蘭臺」は、楚の宮殿の名。「潤厚」は「潤洽」に通じ、あまねく潤うこと。「千葉之蓮」は、極楽の蓮の台。「思淨」は阿弥陀仏の淨土を思うことであろうか。「一乘一實」は、唯一無二の真如。「功力」は、功德の力、修行によって得た力。「有頂」は、物質世界の最高所。「無間」は、絶え間のないこと。「利益」は、すぐれた利点、功德。「沙界」は、恒河沙（ガンジス河の砂

のように数が多い)の世界の意。「済度」は、衆生を導いて悟りの境界に渡すこと。「無漏」は、有漏の対で、漏れ出る不浄なものがない、煩惱のないこと。「通経」は、経義に通じること。

「返経」と読んできたが、その義は未詳。「多文」は、学問の深いこと。「解」は、解脱、さとり、理解だが、この文字は他の

「解」とは字形が異なるから、別の字である可能性も大きい。

「解文」は「布施」のことかとする解もある。^(注10)この部分もまた仏教語を重ねて文なした難解な文章で、判読の誤りもなお残るかもしれないが、おおよそ以下のような内容であろうか。

天地万物の運行に帰依し奉る。まことに大施主亜相殿下は、高官厚祿にして、久しく一門の光榮を高い官職に施(ほこ)つて、なお百年の運命を次代へと送る。極楽浄土の蓮華の台を思えば遠及するであろう。この法会の筵に集う聞法随喜の人、入来結縁の輩もすべて、皆一乗一實の功德の力に答えて、必ずや今世後世の願念を満たすであろう。さらに仏は、最高の絶え間ない功德に至るまで、恒河沙世界の済度に同じく、衆生を導いて煩惱のない悟りの境界に渡してくれるであろう。(最後の一文「抑通経有多文、其解文如何」は、正解をえない)。

正確な把握は困難であるが、大施主亜相殿下から御子左家の百年・千年に及ぶ運命に言い及び、法会の筵に集うすべての聞法随喜・結縁の人々の済度に筆を及ぼして、結語としたものである。

五

同じ『春華秋月抄草』第十九の紙背文書(第十七丁目紙背)に、宗性自筆の消息案がある。以下のとおりである(図版6参照)。

(袖書) 藤大納言の母ハ去年にて候歟
又今年にて候歟いつうせられ
候ぞしるしたまはるへく候

京極中納言入道御事

さきにくはしくしるし

たまはりて候返々よろこひ

いり候それをもちてとかく

かきなして候かさねて人

遣まいらすへきよし仰を

かふり候あひた又申候

一うせられて候年号月日

不審候八講ハ今月廿日おこ

なはむとせられ候これは

うせられて候日にて候か

不審候

本消息の内容は、定家の何回忌のための願文か表白文の執筆を依頼された宗性から、藤大納言為家家の政所か家司の誰か宛に遣わされたものと思しく、今月二十日に行われようとしている八講のその日は、定家が亡くなった日なのか否か、不審がある旨の質問状で、あわせて為家母の没年が去年であったのか今年なのかを尋ねている。それらのことを勘案すると、宝治元年（一二四七）八月上旬ころ、八月二十日の定家七回忌と十一月四日の定家室一周忌に関するものと特定できる。

このような消息案が残っていることから、藤大納言為家からの誂えにあたっては、八講の日取りや故人の死没年月日、施主としてどのような内容を盛り込み、また特にどのようなことを強調してほしいか、といった希望が予め宗性に文書で伝えられ、その後実際の執筆に直面して新たに生じる不審については、この消息のようにそれを質し、使いの往来が何度か繰り返されて、文書や口上をもって不審が晴らされ、完成稿に到達したものと推察される。いま考察している定家七七日忌の文章の場合も、同じ手順をふんで作成されたにちがいないのである（『春華秋月抄草』は元仁元年中に抄し始められているが、巻第十九は、宝治元年八月以降の短期間に整理されたと見られる）。

六

この文章には、標題もなく、末尾に日付も願主の名も記されていない。草稿だから書かれていないと見えなくもないが、施主為家が、「大・施主・重相・殿下」「報恩謝徳ノ御志」「孝行追修ノ御誠、切ニ意底ニ御スヲ以テ」などと、敬体で遇されている点に特色がある。そのことは、施主為家の立場からではなく、執筆を依頼された宗性の立場において書かれた文章であることを意味しよう（第一段落は、「所生」「惠業」「先考」などの語彙において、施主為家に寄り添う形で書かれているが、第三者の筆としても不自然ではない）。

「諷誦文」という形式の文書がある。本文の前に三行にわたって、「敬白／請諷誦事／三宝衆僧御布施」の標題（事書）を有し、次いで布施の品名並びに数量、そして「右」として供養の趣旨・願意を述べて、「諷誦所請如件」に類する文言で本文を結び、日付と願主の名を添えるのを定型とする。従来の理解では、「仏事を修するに当り、三宝衆僧に布施を贈り、諷経を請ふために出す文書」^(注11)、すなわち僧に経・諷誦文の読誦を請う文書とされてきたが、諷誦とは布施のことで、仏・僧に向かって布施を受納するよう請うというのが本来的な性格だとする説が出されている^(注13)。当然のことながら、願主の立場において執筆された文

章である。しかし、この文章は、その冒頭の様式を欠き、記主の立場を異にする故に、諷誦文ではない。

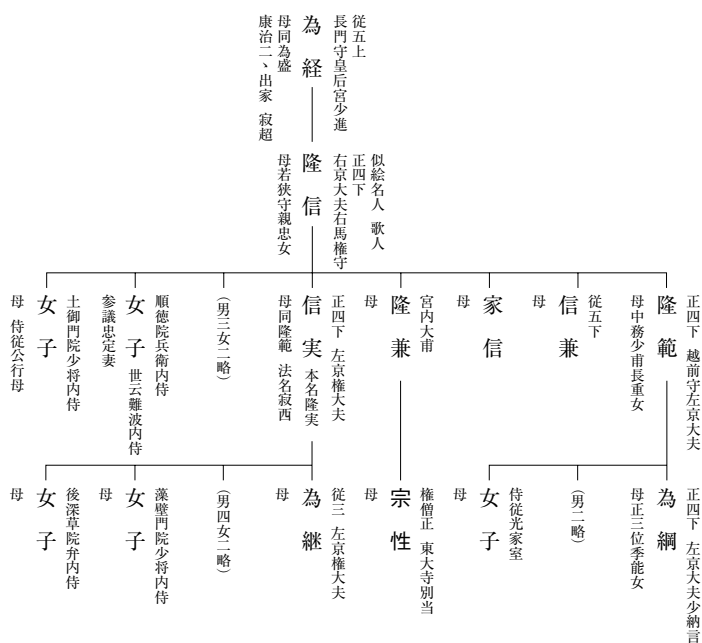
この文章に「藤原定家七七日遠辰表白文」の呼称を与えたのは平岡定海師で、宗性その人による標題はない。「表白文」とは、法会や修法の時に、その趣旨を仏および参加した僧俗の人びとに告げ知らせる文章である。^(注14) また「表白」とは、仏教用語としては、法会や修法などで導師が趣旨を書いた文章を仏前で三宝と参会者に告げ知らせる意であるが、古文書学では、祈願の趣旨を書き、呪願文を副えた願文のことをいい、呪願文だけを表白^(注15)ということもあるという。「呪願文」とは、施主に仏菩薩の加護利益が与えられることを祈願する文章で、法会において呪願師によって誦され、四字句を長く連ねた構成をもつ点が一番の特徴である^(注16)。この呪願文の定義をこの文章に及ぼしてみると、定家追善を措いて施主への利益加護というのも一面的であるし、何よりも四字句を連ねる形式・構成において当たらない。

『本朝文粹』卷第十三に「表白文」としてはただ一編、前中書王の「396天皇御筆法華經供養講説日問者表白」(天曆九年〔九五五〕正月四日)が収められている。短編ながら、「金輪聖主」に始まる問者としての立場からするもので、宗性の本作は時代は下るけれどもこの系列に連なる文章であるように見える。先に見た紙背書付の一文(「詩歌風月、窮粹深於意底」云々)の前に、「宗性 承源」の名を覚えとして標題の如くに記している。これ

は定家七七日の法会に招請された問者が宗性、答える講師が承源であったことを伝えているであろう。つまり宗性は、この法会の問者(また講師)として法会に参加し、この文章を実際に仏前で三宝並びに参会者に読み聞かせたものと思われる。だとすれば、この文章はやはり「表白文」と呼称されて然るべきもので、『本朝文粹』の標題に倣えば、「藤原定家七七日法華八講問者表白」などとあり、「宗性」の名を付随するものだったのであるまいか。

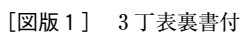
この文章の意義の第一は、残るところ必ずしも多くない「表白文」の伝存する一編として、追善の仏事法会における具体的ありようと内容を窺わせる資料であるところに存するであろう。ただ門外漢として、その点に関する追究の不徹底を自覚しているが、当面の私の関心の中心である、定家と為家の伝記資料としてこれを読めば、定家についてもまた為家についてもその意義は小さくない。すなわち、定家については、第二段落に展叙されるその生涯の業績の総括と、とりわけ臨終時に自ら筆を執って「弥陀如来決定来迎」の願念を書き付けるといふ奇特の行為を伝えていること、施主為家については、第三段落に強調される半生の業績の総括が、値い難い明時に遇って忠直を賢王聖主五代の朝に抽んで、興し難い家門を興して再び官禄を襲祖の跡に繼いだことだとされている点にある。宗性の文章ではあっても、為家からの依頼の趣旨がまさしくその点にあったか

(1) 『尊卑分脈』系図を取捨して、宗性の略系図を示す。



宗性伝については、注(2) 平岡著書のほか、『国史大辞典』第八卷(吉川弘文館、昭和六十二年十月「宗性」(そうしょう)の項(平岡定海執筆)に簡明な解説がある。

- (2) 平岡定海『東大寺宗性上人の研究並史料上』（日本學術振興会昭和三十三年）「宗性上人年譜」「元仁元年是年」の条。
- (3) 辻彦三郎『藤原定家明月記の研究』（吉川弘文館、昭和五十二年五月）。
- (4) 『鎌倉遺文古文書編』第八卷（五九三五）（東京堂出版、昭和五十年四月）。
- (5) 中村元『仏教語大辞典（縮刷版）』（東京書籍、昭和五十六年五月）。
- (6) 「春木」は筆のことであろうか。「芸圃荒而詞少、春木之筆已秃」（大江家国「夜月照階庭詩序」）。
- (7) 佐藤恒雄『定家の最晩年』（和歌文学大系）第六卷『新勅撰和歌集』月報二十七、平成十七年十月。
- (8) 佐藤恒雄『御子左家三代の悲願』（香川大学教育学部研究報告）第1部第一一七号、二〇〇二年十一月。
- (9) 「二日八講」については、別稿「藤原為家の仏事供養について」（広島女学院大学大学院言語文化研究紀要）第九号、二〇〇六年三月）参照。
- (10) 後藤昭雄『諷誦文考補』（詞林）第三十七号、二〇〇五年四月）。
- (11) 相田二郎『日本の古文書 上』（岩波書店、昭和二十四年十二月）。
- (12) 今成元昭『諷誦文』生成考（『国文学研究』第一〇二号、平成二年十月）。奥田勲「善妙寺の尼僧——明行・諷誦文をめぐる——」（『聖心女子大学論叢』第九十二集、一九九九年三月）など。
- (13) 後藤昭雄『諷誦文考』（講座平安文学論究）第九輯、風間書房、平成五年十一月）。注（10）所掲稿。
- (14) 後藤昭雄『表白文』（新日本古典文学大系『本朝文粹』（岩波書店、一九九二年五月）「文体解説」）。
- (15) 野瀬精一郎『表白』（『国史大辞典』第十一卷、吉川弘文館、平成二年九月）。
- (16) 後藤昭雄『呪願文』（新日本古典文学大系『本朝文粹』（岩波書店、一九九二年五月）「文体解説」）。

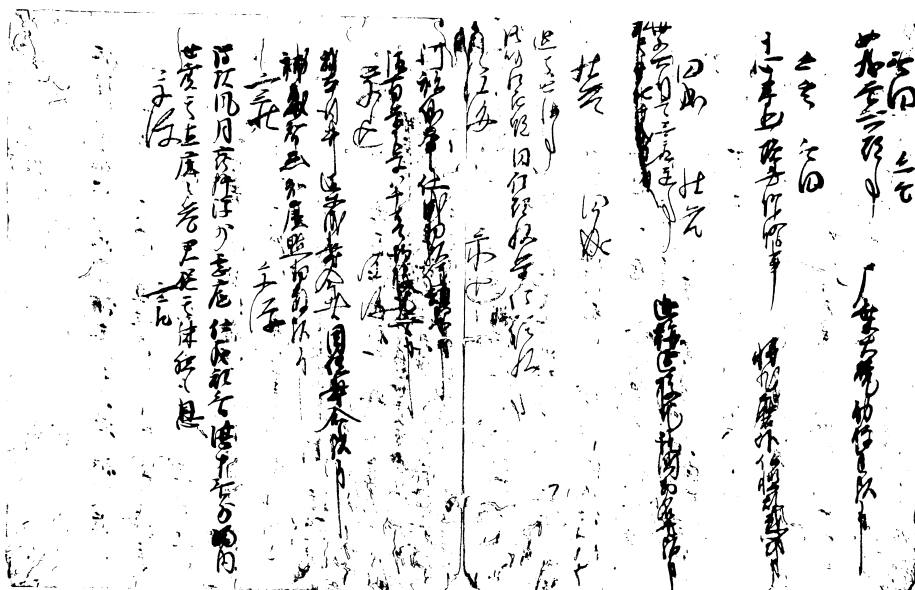


[illegible]

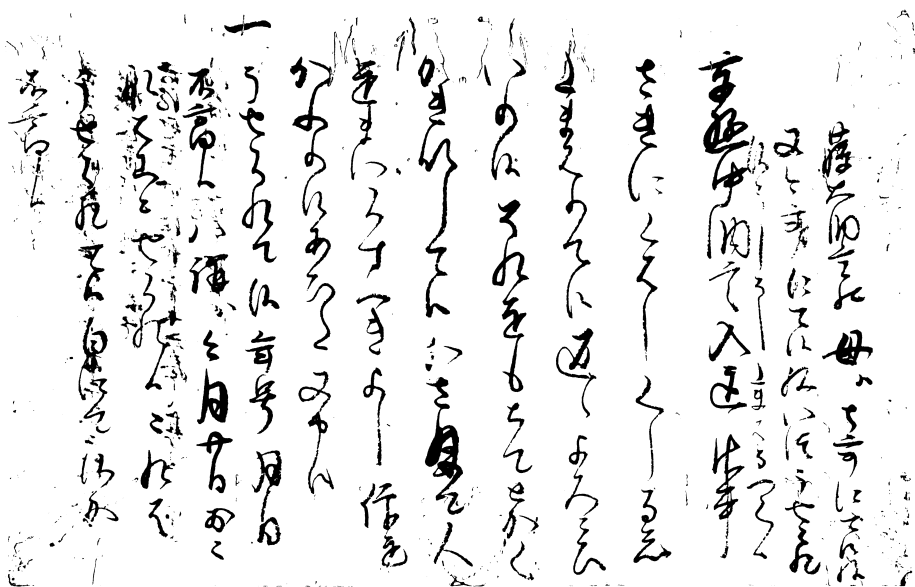
〔図版3〕 5丁表裏本文

然則序及表之空相附下而實無緣久絕
 一肉之空亦云味而無味故百年之天運
 之廣而重之能而復固原而果之通居行通
 及身取相而進去之入身而進去之身
 皆天一念一念之功力之能而自世之
 合則有而法之同則有去而無同則有
 所存者然則此道之可及不可及者

〔図版4〕 6丁表本文



[図版 5] 4丁紙背書付



[図版 6] 17丁紙背宗性消息案

Hyobyakubun of Fujiwaranoteika 49th day

Tsuneo SATO

Abstract

Draft of “Hyobyakubun” Tameie, who is a legitimate son as well as sponsor of memorial service, required a learned and conscientious monk of Todaiji Temple to write for 49th day memorial service for the purpose of praying that Fujiwaranoteika rests in peace was found in “Shunkashugetsushoso,” one of the books written by the monk. After ensuring understanding of the sentences as well as comprehending in details by adding interpretation and annotation, significance related to biography research of Teika and Tameie was referred.